

2009年7月8日

## 博士学位論文審査報告書

大学名： 早稲田大学  
研究科名： 人間科学研究科  
申請者氏名： 柴山 信二郎  
学位の種類： 博士（人間科学）  
論文題目： タイ深南部における教育機関の多様化とムスリム学生の価値観  
論文審査員： 主査 早稲田大学教授 店田 廣文 博士（人間科学）（早稲田大学）  
副査 早稲田大学教授 蔵持 不三也 博士（人間科学）（早稲田大学）  
副査 早稲田大学教授 寒川 恒夫 学術博士（筑波大学）

柴山信二郎氏の学位申請論文を、上記審査委員会は人間科学研究科の委嘱を受け審査してきましたが、2009年7月1日に審査を終了しましたので、以下にその結果を報告します。

本論文の目的は、仏教国とのイメージが強いタイにおいて、ムスリムが人口のマジョリティーを占める同国深南部を研究地域とし、1950年代末から実施されているイスラーム教育改革にともなう教育機関を通じた価値観形成のメカニズムとその渦中にあるムスリムの価値観を明らかにする試みである。先行研究は、教育機関の歴史的経緯やその変遷を明らかにしてきたものの、多様化する教育機関の社会的役割やムスリムへの影響については十分に論じておらず、同地域のムスリムはマレー・イスラーム社会の中に生活する人々として同質的に描かれてきた。差異の出現を示唆する報告もあるが、実証的研究は未だ見当たらず、本研究では、教育改革により多様化した教育機関が伝達する文化要素を考察し、そこで学ぶムスリム学生の価値観を実証的に描き出すことにより、価値観形成のメカニズムについて論じることを研究課題とした。この目的にしたがって、本論文は、6つの章と参考文献・資料で構成されており、各章の概要は以下のようである。

序章では、深南部のムスリムの価値観形成において教育機関の役割に注目する意義について叙述し、「文化要素」の概念を導入した価値観形成における本研究の枠組みが提示される。深南部のイスラーム教育に関する先行研究のレビューと課題整理がなされる。

第1章では、社会・経済状況を概観するとともに、深南部の歴史を地域史の視点から捉える。タイの学校で教えられるナショナル・ヒストリーでは、深南部はタイの属領と位置付けられ、その領土であることを前提に語られるが、地域史的な視点から見ると、深南部がタイに組み込まれたのは20世紀初頭であり、それ以降も同地域にはマレー・イスラーム社会の文化が色濃く継承されている。武力によりタイに併合された歴史もあり、同地域は現在でも反政府のイスラーム主義が活発な地域であることが示された。

第2章では、タイにおける近代教育制度の導入、および深南部のイスラーム教育の変遷が概観される。ラーマ5世時代に近代教育制度の導入が開始され、それは当初より仏教と深く結び付いており、愛国心や国王への忠誠を養うことを目的としていた。しかし、宗教施設であるモスク等でのマレー語パッタニー方言とジャウィ語によるイスラーム教育とは相入れないものであり、近代教育制度の定着は容易ではなかった。このため、伝統的イスラーム教育機関と政府が導入した近代教育機関が併存することになった。

一方、マレー・ムスリムの統合と反政府のイスラーム主義の抑制を目的に、政府は1961年にイスラーム教育改革を開始し、深南部への近代教育の普及が推進されている。イスラーム教育改革は、伝統的イスラーム教育機関を対象にした改革と国公立学校の近代教育課程へのイスラーム教育の導入であり、深南部の教育機関は多様化し、イスラーム教育および近代教育を受けるムスリムも増加傾向にある。

第3章では、多様化する深南部の教育機関の教育形態、社会的役割を分析し、そこで伝達される文化要素について考察される。深南部の教育機関は未登録のポノ、モスク宗教教室、ターディカおよびポノ改編により誕生した私立イスラーム学校、イスラーム教育のみを行うイスラーム宗教学校、ポノ教育機関の伝統的イスラーム教育機関と、タイ政府の近代教育の導入により設立された国公立学校に大別され、教育形態は多様である。イスラーム教育では主に「地域社会の成員形成」の役割と「地域文化」の文化要素が伝達され、近代教育では「国民社会の成員形成」と「産業社会の成員形成」の役割と、「国民文化」と「産業文化」の文化要素が伝達されている。

タイ政府は、深南部の教育機関に近代教育を導入・普及させることにより、同地域のムスリム文化をマレー・イスラーム文化からタイ文化へ転換することを試みており、かつてはイスラーム教育一辺倒であった深南部でも、イスラーム教育および近代教育の双方が一般化してきており、より多くのムスリムが文化的転換の過程に巻き込まれていることが明らかにされた(本章の元になった論文として、柴山信二郎「タイ深南部における教育機関の変遷と社会的役割の多様化」『人間科学研究』20-2、2007があるが、大幅な加筆修正がなされている)。

第4章では、ムスリム学生のアイデンティティ、人生観、特定事件に関する見解を実証的に検証することにより、ムスリム学生の価値観が描き出される。ムスリム学生のアイデンティティには、「イスラーム」と「地域文化」が内面化されることにより生まれる深南部への準拠意識が強く見られ、また「国民文化」が内面化されることによる「タイ人である」という意識や国家への準拠意識、更には産業社会の一員となるために必要な能力を有しているという自負も見られ、そのアイデンティティには「地域文化」、「国民文化」、「産業文化」の文化要素が内面化されている様が述べられる。

一方、ムスリム学生は人生観として、「専門知識の習得を目指して大学へ進学し、そこで学んだ知識を活用して、将来の生活を営む」というようなライフ・コースを描いている。このような人生観からは、「産業文化」と「国民文化」や「地域文化」の文化要素の表れと

捉えられる道徳観・倫理観等が反映されていることが見て取れた。また、反政府のイスラーム主義活動の一環と見做される特定事件に関する見解を通して見ても、ムスリム学生の価値観は、「地域文化」の文化要素を基盤としながらも、「国民文化」と「産業文化」の文化要素も取り込んだ多様なものとなっている（本章の元になった論文として、柴山信二郎「タイ深南部のムスリムの変容 - 教育的背景の異なるムスリムの『グルセ・モスク事件』および『タクバイ事件』に対する態度と価値観についての考察』『人間科学研究』19-1、2006があるが、大幅な加筆修正がなされている）。

結章では、イスラーム教育改革の過程が、イスラーム教育一辺倒であった同地域の教育に近代教育を導入することにより、国民社会と産業社会の成員を形成する試みであることが改めて確認される。その過程を通して、深南部にも近代教育が普及し、「イスラーム」、「マレー語パッタニー方言とジャウィ語」、「マレー・イスラーム文化」等の「地域文化」の文化要素に加え、「国家」、「宗教（仏教）」、「国王」の国家三原則や「タイ語」、「タイ文化」等の「国民文化」、養鶏の知識・技能等の「産業文化」等の多様な文化要素が深南部のムスリムに伝達されるようになった。

ムスリム学生は、それらを選択的に内面化し、価値観を形成している。ムスリム学生は「イスラーム」に相反しない様々な文化要素を選択的に内面化し、階層的な価値観を形成している。とりわけ近代教育機関で学ぶムスリム学生の価値観は、通説に反し、伝統的マレー・イスラーム社会の中に生活する人々というかつての深南部のムスリムの価値観とは異なるものになっている。

本論文は、これまで実証的研究の空白地域であったタイ深南部のマレー・イスラーム社会を対象として、タイ政府の実施する教育改革がムスリム学生の価値観形成にどのように作用しているかを明らかにした数少ない貴重な研究である。同地域は、現在でもイスラーム主義の過激派と政府の抗争の舞台となっている地域であるが、10年近くにおよぶタイ現地での研究と現地調査によって、同地域の現状と今後の課題を丹念に描き出したことは特筆に値する。本論文の分析枠組みである価値観形成のメカニズムでは文化要素を軸として、イスラーム教育機関と近代教育機関が併存し機能している現状を、同地域の歴史的形成過程や教育制度の歴史をふまえて、ムスリム学生への面接調査結果によって分析し、また彼らの価値観が、選択的な文化要素の内面化を経て、形成されていることが明らかとなった。

本論文は、タイ深南部のイスラーム社会という地域枠組みの中での分析が中心であったが、イスラーム世界の拡大を前提とすれば、少なくとも隣国マレーシアにおけるイスラーム教育の同地域への影響をも視野に入れながら、価値観形成に関する研究を深めることも課題であろう。また価値観形成と文化要素についても、よりダイナミックな文化受容過程を視野に入れる研究方法もあろう。以上のような課題を抱えているが、仏教国タイという国民国家におけるマイノリティである「イスラーム社会」の成員形成が、如何なるメカニズムによっているかを解明した大きな研究的意義があることは言うまでもない。今後は、タイ国内の一事例にとどまらず、広く近代教育とイスラーム教育の相克について、国民国

家の統合や「多文化主義」という視点から一般化する可能性も秘めており、今後の研究の発展が期待できる。

以上のことから、本審査委員会は本論文が顕著な学術的価値を有するものであると判断し、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以上